

団蔵入水

戸板康二



団蔵入水 だんぞうじゆすい

昭和五十五年九月十日第一刷発行

著者——戸板康二

© Yasuji Toita 1980, Printed in Japan

発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話東京三—四三—二二 振替東京六—三六三

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——藤沢製本株式会社

定価——一、二〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

目 次

団蔵入水

7

殺された仁左衛門

55

名優退場

73

*

上総楼の兎

103

まくわうり

133

真綿と針

163

筆屋の養女

189

踊り屋台

219

男親の親指

253

あとがき

284

初出一覧

286

装幀 山本武夫

団蔵入水

団蔵入水

一

昭和四十一年六月四日は土曜日である。私は東横ホールで、歌舞伎を見ていた。

三代目延若の主演する「盛綱陣屋」が終り、廊下に出ると、時事通信社の演劇記者のYさんが、人波をかきわけて、私に近づいて来る。

その表情が引きつっているので、何かあったのだなと直感した。Yさんは東京演劇記者会に属する唯ひとりの女性ジャーナリストで、いつもは愛嬌こぼれるひとなのに、この日に限っては、顔色が冴えないのだ。

私の腕をとって、隅のほうにつれてゆき、小声で、「たいへんなことがおこりました」という。「団蔵さんが投身自殺をしたそうです」

私の顔から見る見る血の色がひいてゆくのが、自分でもわかった。私は「それはほんとですか」と、まことに気の利かない反問をした。

詳細がはいり次第また知らせる、とりあえず明日早く団蔵に関する文章を三枚ほど書いていただけませんかというおいて、Yさんは劇場事務所の電話を借りに、かけ出して行った。

次の幕間^{まぐあい}には、座席にならんで見ていた記者が、みんなこの事件について、もう知っていた。新聞記者ばかりでなく、劇評家も大ぜいそこにいたが、こんな時に、舞台で芝居をしている俳優

は気の毒である。

私をふくめて、そこにいるすべての人たちは、頭の中にそれぞれ、忽然と死をえらんだ老優のつい二カ月前に歌舞伎座の引退興行で演じた「菊畑」の鬼一法眼や「助六」の意休の姿を去来させている。

この異常な、しかし誰が見ても劇的な、ひとりの俳優の死の前に、その時演じられている劇が、色褪せて見えても、それは仕方のないことであつた。

終演の直前に、私が毎月劇評を書いている東京新聞からも連絡があつて、明日の朝刊に追悼文を書いてもらいたい、車をまわすとのことであつた。むろん、承諾した。

戦後に次々死んで行つた名優について、その都度文章を書いたが、この日のように訃報を劇場で知り、帰りに新聞社にまわつて原稿を作るのは、はじめての経験だつた。

八代目市川団蔵は、その時八十四歳で、さつきも書いたように、四月の歌舞伎座で引退を披露した。この興行は、団蔵が前々名の市川茂々太郎から前名の市川九蔵になつた時、実父の先代団蔵とともに「鈴ヶ森」に出て、白井権八に扮した興行よりも、九蔵から団蔵を襲名して「毒茶の丹助」を演じた興行よりも、はるかに大規模で、華かな興行であつた。

演じた役は鬼一と意休で、両方とも白髪 of 総髪に、金の縫いとりをした衣裳をつけている点で、共通した印象を与えるふけ役だったが、意休のほうは、勘三郎の助六が水入りのくだりまで演じたために、団蔵は舞台上で残酷に殺されて、とどめを刺されるのである。

団蔵の歿後に網野菊さんが「群像」に発表した「一期一会^{いちごいちえ}」という小説は、この老優の死をいたむ思いを切々と感じさせる名作であるが、網野さんは、引退する役者が舞台で殺されるのに、いたく心を痛めている。

水入りというのは、花川戸助六が、敵役の意休を殺したあと、廓の群集に追われて、用水桶の中に姿を隠す場面で、いつもの「助六」には演じない場合のほうが多いのだが、たまたまこの時は、そこまで見せたのだ。

団蔵が瀬戸内海を航行する汽船から身を投じたと聞いて、どんな時でも警句をいう幕内の某優が、「助六の水入りではなくて、意休の水入りだ」といったあと、周囲の者がいつもとちがって、誰もこのジョークを笑わないのに気がついて、身体が凍るような気がしたと、のちに頭をかきながら話していた。

新聞社まで行く車の中で、ある程度事件のデータをかいつまんで知っていた私は、二十日前の朝日新聞日曜版に、四国八十八カ所を巡礼して歩いている団蔵の写真が出ていたのを思い出していた。

紺の背広の上から、正しくは笈摺^{わいずる}と呼ばれる白の袖無しの遍路の衣裳を着、杖について、八幡札所熊谷寺の石段を昇っている写真である。

私は、ふしぎに私の目に残っている巡礼の身なりをしたまま、団蔵が海にはいったのだというふうに思いながら、車を降り、夜更けてもお明るく灯のともっている編集局へ上って行った。

その夜さっそく私の書いた追悼文が、翌日の朝刊に出たが、見出しには、「胸を打つ名優の最期」となっていた。

二三日たって、安藤鶴夫に会うと、「団蔵について書いた文章のあの見出しはおかしいよ」といった。「あれでは、団蔵が名優だったということになってしまふ」

安藤鶴夫は芸についてきびしい姿勢を崩さなかった劇評家で、あえて筆名に鬼という一字を使った岡鬼太郎よりも、もっと妥協をせずに押し通した。

鬼太郎は、見るにたえない芝居を、「御一同御苦労、まずはめでたしめでたし」と書く皮肉な筆の人だったが、安藤鶴夫は、そんな間接表現をするほど、寛大ではなかった。

自宅に訪ねて来た若い芸人で、芸を一向にみとめていない若者が、応接間で、庭に向いた椅子に腰をおろそうとしたら、「そこには、喜多村緑郎や桂文楽がかけたのだ、別の椅子にすわりたまえ」ときけんだという話が伝わっている。真偽は不明だが、そんなことをいいかねないところから、できた伝説であるのはたしかである。

ところで、そういう安藤鶴夫の言葉は、私をドキリとさせた。じつは、この見出しは、私が考えたのではない。私は「ある老優の死」という題を一応つけておいたのだが、デスクが、「名優」という表現を使ったのだ。

そういわれて、私は帰宅すると、スクラップ・ブックに貼ったばかりの自分の文章を読み直したが、私は文中「名優」という文字を、どこにも使っていないかった。

同時に、私は、安藤鶴夫の言葉から、突然、団蔵の悲劇を痛感した。「名優」という点で、同時代の王者九代目市川団十郎とさえ、いつも張り合い、対立した父親の子として、八代目団蔵は、つねにある意味のコンプレックスを持ち続けたにちがいないという事情を、私はくまなく理解したのである。

二

八代目団蔵になったのは、昭和十八年十月の歌舞伎座で、それは亡父の三十三回忌追善興行であった。その前の九蔵という時代が、初代中村吉右衛門一座のわき役として、多くの観客に記憶されている。

つまり、「佐倉義民伝」の百姓十作とか、「俊寛」の康頼とか、「石切梶原」の六郎太夫とか、「盛綱陣屋」の時政とか、吉右衛門の得意の演目の時に、九蔵はわきにまわって、そういう役々をつとめた。

吉右衛門歿後も、幸四郎や勘三郎に対して、いつも同じような役どころであった。

九蔵から団蔵をつぐ時に、はじめは固辞し、なかなか頭をたてにふらなかつたといわれている。それは団蔵という名が、初代から亡父の七代までのうち、すくなくとも四人が、演劇史にあきらかに残る俳優であることを知っていたためである。

戦後は、ひとつには松竹という興行会社が、襲名や故人の追善を商業政策として、しきりに企画するためもあり、実力において先代にとっても及ばない伎倆の俳優でも、「会長のおすすめで、大きな芸名を継承するケースがめずらしくなくなった。

しかし、九蔵改め団蔵ということが、この俳優の性格からいっても、大へん負担で、ひどくおっくうだったというのは、私にはよくわかるのである。

市川団蔵というのは、初代の場合、団十郎の門弟としての名跡で、初代は初代団十郎に入門したが、一時師匠と不和になり、市川家から離れていた時期があるようだ。

その初代の子の二代目が早世したあと、初代の門人が養子に入って三代目となり、三代目の養子が四代目になった。五代目は四代目の実子、六代目は血縁ではなくて、外から家系をついで襲名したのだが、腕の達者な幕末の名優であった。

七代目団蔵は、この六代目の養子となった人で、明治の歌舞伎役者として、立場は傍流に属したが、同じく名優として、多くのファンに支持された。

八代目団蔵は、亡父から聞いた話を克明に筆記し、戦争の最中に、求竜堂から、「七世市川団蔵」という、貴重な文献を刊行した。

その中に書かれている挿話や史実を丹念に見てゆくと、七代目の人柄が、カメラのピントを合わせてゆくように、はつきりと定着してゆく。

この本だけ読んでも、七代目団蔵という人は、名人といわれた四代目市川小団次の写実的な芸